

「図書館は未知の世界へ開かれた扉」

北見工業大学副学長・図書館長 榮坂 俊雄



図書館の3大構成要素は「本，場，人」とされています。特に大学図書館においては、近年、本だけではなく電子ジャーナル、検索システム、機関リポジトリなどの学術情報収集・利用・発信のためのデータベース、閲覧場所だけでなくグループ学習や交流の場としてのラーニング・コモンズ、そして図書管理業務に加え調査支援やリテラシー講習など様々な企画運営を司るスタッフが日々の教育研究活動を支えています。

一方、サイバー化時代の要請に応えつつ、昔も今も大学図書館の本質が、実体としての「知の殿堂」であることに変わりはありません。私が大学に入学し、初めて図書館に立ち入ったとき、膨大な本の量に圧倒されたことを思い出します。量だけではなく、こんな資料もあるのか、と知の深さと広さを垣間見た思いがしました。探検気分で暗く黴臭い資料室の奥深くに歩を進めると、電灯の下で一心不乱に文献を読み漁っている先達が居り、彼らの仲間入りをした喜びが沸々と湧いてきたことを憶えています。

人はいつの世も、学ぶことで自らの可能性を拓いてきました。そして図書館は主体的な学びに大切な役割を果たしてきました。そのことを示す逸話をひとつ紹介しましょう。社会哲学者エリック・ホッファーは7歳で事故により母親と視力を失い、正規の学校教育を受けませんでした。しかし、15歳で奇跡的に視力を回復し、貪るように読書を始めました。その後は季節労働者として労働の合間に図書館に通い詰め、独学で物理学と数学、植物学などをマスターし、港湾労働を続けながらカリフォルニア大学バークレーの政治学教授になったのです。ホッファーの残した箴言の一つに次があります。「他人と分かちあうことをしぶる魂は、概して、それ自体、多くを持っていない」。学問の素晴らしさは得られた知識を独り占めするのではなく、分かちあうことにあることをホッファー一流のシニカルな言様で表現したものだと思います。

大学は学問を創造し、教育を通じてその体系を継承し共有することで社会に貢献するところです。図書館は大学の象徴であり、未知の世界への入口です。新入生の皆さんは、是非、足繁く図書館に通い、



それぞれの新しい世界を探し当ててください。また元新入生の方々も度々図書館を訪れ、先達として新たな息吹を吹き込み続けていただければ幸いです。本学図書館は、これからも学問の生気を感じ、賜物を分かちあう場であることを大切にしていきたいと惟います。そして規模は小さくとも、魅力的な存在として成長し続けるよう努めてまいります。皆様には今後ともご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

ヨーロッパ最古の大学の一つ、ボローニャ大学の図書館

Incredible Libraries of the World より

<https://www.travelsofabookpacker.com/blog/incredible-libraries-world>